令和３年度　２年目研修　授業実践研究のまとめ

落ち着いて学習に参加するための環境作りや、教材の工夫について
―自閉スペクトラム症児Ａ君への取り組みを通して―

１　テーマ設定の理由

昨年度は、小学部で自閉スペクトラム症の男子児童を対象に、主に国語科の授業を通して「コミュニケーション能力の育成」をテーマに、実践に取組んできた。大きくコミュニケーション能力の育成という観点で進めてきた実践だったこともあり、実践が大まかな内容になってしまった。この反省点から、今年度は実態を正確に把握した上で、より具体的に目標を立てることを意識し、実践に取組んでいきたいと思う。

今回、対象児として設定したのは、私のクラスに在籍する男子児童Ａである。Ａは自閉スペクトラム症で、現在小学部６年生である。昨年度まで、国語・算数の個別学習はマンツーマン対応だったのだが、今年度から、同じクラスの男子児童Ｂ（自閉スペクトラム症・小学部５年）と一緒に２人で個別学習に取り組むことになった。昨年度の引き継ぎの内容を踏まえ、４月の第１～２週と、算数の個別学習や生活単元学習、音楽などの集団授業において、実態把握に取り組み、Ａは授業中離席や他傷が多く見られた。実態把握を通して、離席に関する見立ては、環境の変化に対する不安に加え、見通しがもてなかったり、内容に興味が無かったりすることが理由であると考えた。また、他傷に関する見立ては、自分の思い通りにならないことに対する不満やイライラした思いを発散する手段ということに加え、楽しんでいる様子も見られたことから、やりとりの一環として捉えているのではないかと考えた。

Ａの将来を考えると、集中して何かに取組むことや、決められた時間何かに取組む力、また、イライラや不安の思いを他傷ではなく自分で調整する力や適切なやりとりの方法を身につけることが、共に必要だと思う。これらのことを踏まえ、今年度は算数の個別学習の時間を使って、Ａが集中して学習に取り組むことが出来るような環境作りや、教材の工夫、そして自己の気持ちの調整について、１年間考えていきたいと思う。

２　実践内容

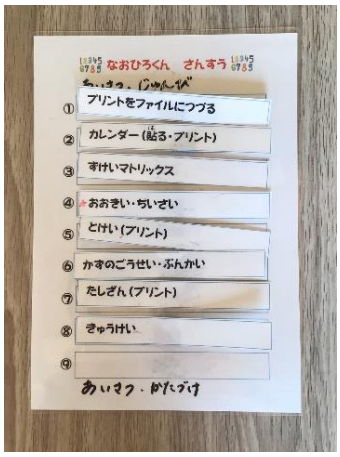
（１）集中できる環境を整え、授業に見通しをもたせる（４月～５月）

４月当初は、前年度と同じ教材を用いてＡの実態把握に取り組んだ。教材の内容や授業の流れは概ね理解しており、プリントや教材を手渡すと、引き継ぎ通りの反応を見せた。そのため、課題内容に関しては、問題無いと考え、同じ内容の教材を用いて取り組むことにした。しかし、授業中は立ち歩いて教室内を物色したり、一緒に勉強をしているＢや同じく一緒の教室で勉強をしているＣ・Ｄのペア学習の様子を見に行ったりと離席が頻繁に見られた。また、授業途中に「遊びたい！」と道具を持ってきて要求してきたり、遊びに夢中で授業開始時の挨拶に参加できなかったりすることが多々あり、授業に集中できているとは到底言えない状況だった。担当教員や一緒に取り組む友達、教室が変わったことに対する不安や興味、加えて、ペア学習に変わった事による、他児からの視覚や聴覚への刺激が“離席”とし

て、そして、“気持ちの切り替え”に困難さがあることから、休み時間との気持ちの切り替えが上手く出来ず、これらの不適切行動が見られるのではないかと考えた。

これらの様子を踏まえ、担任団で話し合いを行った。その中で、以下の支援に取り組むことにした。まず、離席については、原因として変化に対する不安や興味と、他児からの視覚や聴覚への刺激が考えられた。前年度の引き継ぎを踏まえ、教室や担当教師、クラスメイトの変化に対する不安や興味は徐々に無くなっていくとのことだったので、他児からの視覚や聴覚への刺激を軽減するための支援として、同じ教室でＡ・Ｂのペア、Ｃ・Ｄのペアが一緒に学習していたところを２教室に分け、同じ教室で学習する人数を減らすことで、刺激の軽減を図ることにした。

気持ちの切り替え面では、授業のはじめと終わりが分かるよう、課題の流れのスケジュール（図１）を作り、スケジュール内には、「休憩」として「課題が終わったら好きなことが出来る！」という時間を敢えて作った。また、授業と休み時間の切り替えが難しいことから、休み時間にはタイムタイマーを用いて休み時間を視覚化し、休み時間の“おわり”を視覚化してＡに伝えるようにした。スケジュールの形式は、国語・算数・自立を全て同じ形式に統一し、タイムタイマーを用いて休み時間を視覚化することや「休憩」をスケジュール内に設けることは、時間帯が同じ国語の個別学習でも同様に取り入れることで、Ａが混乱しないようにした。



【図１】課題スケジュール

以上の支援に取り組んでいった。これまでは課題１つ終わるたびに、達成感からか、離席や床に寝転がる等の行動が見られたが、スケジュールを操作することで、それらは解消することができた。また、教室内の人数を減らしたことで、刺激も軽減されたのか、友達の様子を見に行く等の離席は劇的に減らすことができた。休み時間と授業との切り替えは毎回できると言えないが、タイムタイマーが鳴ると自分で教材を準備したり、挨拶に参加したりすることも増えた。これらの結果から、Ａは視覚的な情報が優位であり、こちらが見通しをもてるように教材を工夫したり、視覚的に伝えたりすることで、スムーズに授業に参加できることが分かった。

（２）指導目標を定めて、新しい課題に取り組む（６・７月）

４・５月で、スケジュールやタイムタイマーを用いて、授業に見通しをもたせることに加え、「休憩」をスケジュールに取り入れ、気持ちの切り替えが出来るような環境を作った。４・５月を通して、Ｂとの二人での授業や、新しい授業者にＡも慣れ、スムーズに授業に参加することができるようになっていた。しかし、前年度からの教材に飽きてきたのか、授業中の集中力が段々と落ちてきており、スケジュール内の「きゅうけい」のカードを指さし、休憩を要求することが増えていた。そこで、前年度の評価を踏まえ、６月に指導目標を定め、教材も一新して取り組みはじめた。以下はＲ２年度後期の算数の指導目標とＲ３年度前期に定めた指導目標である。

算数	①	数える対象を2、5、10のまとまりと端数に分けて数えることができる	△	①2、5、10のとび数を書く課題では「2、4、6…」「5、10、15…」「10、20、30…」と、小さい数から順番に書いていくことができた。 ②数字の上に、同じ数の「・」を自分で書き、それを数えていくことでおおむね正しく答えることができるようになってきた。 ③文字盤に1分単位の時刻が表示されている場合には、正確に読むことができた。 ④「大きいのはどっち」と聞かれると、正しく選ぶことができた。
	②	1位数同士で、和が18までの足し算ができる	○	
	③	アナログ時計の時刻を読むことができる	△	
	④	大きさや量を意識しながら対象物を区別することができる	△	

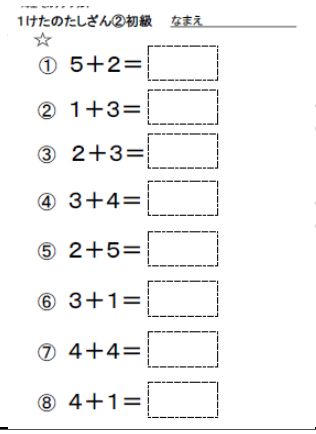
【図２】指導目標・評価　〈Ｒ２　後期〉

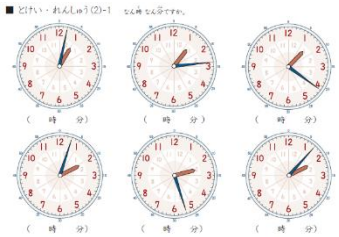
①１位数同士の足し算ができる	②10 までの数の合成、分解ができる
③アナログ時計の時刻を読むことができる	④大きさや量、色や形に着目して分類することができる

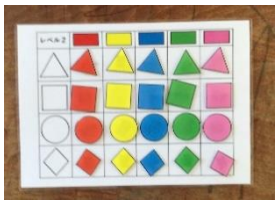
【図３】指導目標・評価　〈R３　前期〉

前年度の評価を踏まえて、指導目標自体は大きく変えずに取り組むことにした。教材は、以下の物を使って取り組んだ。

①足し算　②合成分解　③時計　④大きさ・量・色・形の分







【図４】学習教材

Ａは鉛筆で書くことが好きなため、図４①～③のようなプリント学習を多く取り入れたり、図４④では好きなキャラクターのカードを用いたり、「終わり」が分かりやすい教材を取り入れるなど、Ａが興味をもって集中して授業に参加できるよう工夫をした。

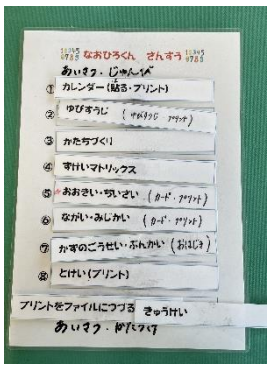
６・７月は以上の教材を使って指導に取り組んだ。この頃になると、４・５月のように環境の変化に対するイライラや不安ではなく、学校行事のための日課変更や、梅雨の湿気や暑さにイライラすることが多くなっていった。そのため、毎日スムーズに授業が進んだ訳ではなかったが、担任団で連携し、１時間目の様子やイライラの状態など､Ａの様子をこまめに情報共有したりして､休み時間を延ばしたり、エアコンや扇風機などを使って教室内環境を整えたりなど、Ａの調子を整えながらの１学期となった。４・５月と同様、課題には嫌がることなく真面目に取り組み、目新しさもあったのか、離席もなく集中して取り組むことができる日も多くあった。

（３）時間いっぱい課題に取り組むことを目指す（９～10 月）

夏休みが明け、２学期が始まった。学校に対する抵抗感は無かったが、暑さに対するイライラは１学期と同様にあったため、継続して担任団との情報共有やエアコン・扇風機での温度調節等を行った。授業では、これまでのリズムを取り戻すために、１学期間取り組んだ同じ課題とスケジュールを使って授業を行った。授業で取り組んでいるプリントを夏休みの宿題として持ち帰らせた事もあり、課題については理解も深まり、問題なく取り組むことができた。また、情緒の安定をねらいにスケジュールに組み込んでいた休憩の時間だが、Ａも環境の変化に慣れ、意欲も芽生えてきたのか、自分から教員が提示した休憩のタイマーを切って授業に参加してくる事もあった。そのため、休憩の時間が無くても、授業をスムーズに行うことができるのではないかと考えた。

これらのＡの変化や成長を踏まえ、２学期は授業に参加できる時間を増やすことを目標にした。そのために、後期の指導目標（図６）に準じた課題（図７）を追加して、物理的に課題に取り組む時間を増

やすことで、授業時間を充分に使えるようにした。課題を頑張る意欲付けとして、休憩は課題が全て終わってからとスケジュールに示し、気持ちが不安定な時は、適宜Ａとやり取りして、授業前の休憩を伸ばしたり、課題数を減らしたりたりして対応することにした。クラスでは、２学期からＡ用のクールダウンスペースが設置され、休み時間や気持ちが落ち着かない時は、そこで好きなことをして過ごすことにさせた。そのため、算数の休憩時間も、その場所で過ごすことにした。

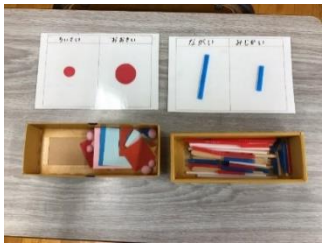


【図５】課題スケジュール

①身近な物の形を捉え、丸や三角形、四角形に分類することができる
②５までの数の合成、分解ができる　③アナログ時計の時刻を読むことができる
④ものの大小や多少、長短が分かる　（⑤）１～10 までの数字を、指数字で表すことができる。

【図６】後期　指導目標

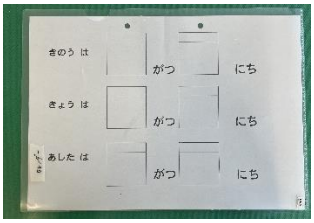
⑤長・短、大・小



⑥指数字

⑦積み木ブロック

⑧カレンダー



【図７】後期　指導目標

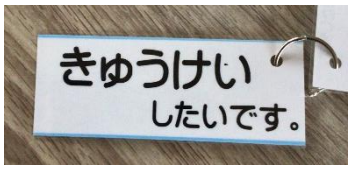
２学期が始まって１週間たったところで、課題の個数を増やしてみたところ、課題に対して抵抗感はなく、取り組むことができた。休憩が無くなった点に関しては、最初の数回は「なんで？」と気に入らず、以前休憩時間に使っていた落書き帳を持ってきてアピールしてきたが、スケジュールを示しながら伝えることで納得し、見通しがもてたのか、それ以降は聞いてくることはなくなった。課題数を増やしたことで、物理的に課題に取り組む時間や机に向かう時間が増え、集中して取り組む時間を増やすことが出来た。１学期と同様、気持ちの切り替えが難しく、落ち着かない時に離席はあるが、教室内を数分散歩すれば、気持ちを切り替えて自分の席に戻ってくることができるようになってきている。そのため、離席に関しては、自分で気持ちを切り替えて席に戻ってくれば良いということにし、Ａの安全面に配慮しつつ、見守ることにした。

しかし、調子が悪い日は気持ちの波が激しく、衝動的に人を叩く・ひっかくなどの他傷が見られたり、衝動的にプリントの裏に落書きをしたりするなどの問題行動が見られる。医療機関への受診や服薬については少しずつ保護者からの理解が得られるようになってきており、学校ではできるだけそれらの行動を出現させないよう、今後の課題として、教材の工夫や対応の見直しを行っていきたいと思う。

（４）問題行動を起こさせないために、支援教材を取り入れる（11 月～1 月）

１学期に見られた環境の変化による離席については、スケジュールやこれまでの経験から見通しをもつことができ、改善することが出来た。しかし、衝動的な他傷や落書きは未だ見られ、他傷に関しては

大人だけでなく、B など友達に対して矛先が向くことが増えていた。これらの状況から、２学期の後半からは、学習内容については習熟を狙い、内容を大きく変えることはせず、特に A の問題行動について考えることにした。



【図８】要求カード①

【図８】要求カード②

問題行動の出現を減らすために、現在までに見られる問題行動の原因について考えた。衝動的な他傷については、相手の興味を引きたい・関わりたい時や、不満やイライラした思いを発散する手段として。落書きについては、プリントが目に入ると衝動的にしてしまう、加えて、手持ち無沙汰で暇なときに現れるのではないかと思う。これらの見立てから、図８の「要求カード①」「要求カード②」を作成した。A は発声において注意喚起をしたり、文字を使って要求したりすることができるが、まだまだ伝えられる語彙が少ないため、まずはカードで伝える練習をすることにした。この支援教材は、イライラした思いを他傷としてではなく、要求カード①を使って「きゅうけいしたいです」と要求したり、要求カード②を使って「できました」と適切なやり取りで教師と関わろうとしたりする練習につなげるための支援教材で、落書きの問題行動についてもこれを用いる。課題が終わったあとに、要求カード②をつかって「できました」と伝える時間を作ることで、課題が終わった後、教師の声かけを待つ手持ち無沙汰だった時間を、教師に対する要求や関わりの時間に用いることにした。要求カード①②に加えて、２学期と同様、できるだけ“書く”課題ではなく、“操作”する課題も引き続き取り組んだ。

取り組み始めて、２ヶ月ほどたち、「要求カード②」は使うことが出来るようになってきた。落書きについては完全になくなったとは言えないが、教材の取り組み方を変えたことが一番有効だったように思う。「要求カード①」は、スケジュールと違うタイミングでの「きゅうけい」になるため、こだわりからか、自分から要求することはほぼ無かった。しかし、A の様子を見て、適宜教師から要求カード①を示し、「休憩する？」「イライラしたときは休憩するとまる（○）だよ！」と等と伝えてきた。クラスでも、カードは用いてはないが、「きゅうけい」と持ち運び電子ボードに書かせることで、練習してきた。繰り返し、取り組む中で自分から「きゅうけい」と書いて伝えることも度々見られるようになり、気持ちの自己調整に対する成長を感じることができた。問題行動について、完全に改善することは難しかったが、原因を探し、問題行動を発生させないように、支援者側が工夫することが大切だと思った。

３　まとめ

１学期からこれまでの日々を通して、A の特性に向き合い指導・支援に取り組んできた。４月当初設定した本研究の目的は、A が一定時間集中して取り組むことができる時間を増やすことと、他傷ではない方法での気持ちの自己調整であり、算数の時間を使って本実践に取り組んできた。昨年度まで、国語・算数の個別学習はマンツーマン対応だったこともあり、自分のペースで取り組めていた時間であった。今年度からはペア学習となり、思い通りにいかないことも増え、この変化は A にとって大きかったのか、４月当初は離席や他傷が多く見られ、気がかりであった。しかし、約１年間を通して A の変化や成長を実感することができた。問題行動については、完全に改善することは出来なかったが、A との関わりを通して、問題行動の原因を探し、改善していく過程は、私にとってとても良い勉強になった。

これまでの日々を通して、教員との情報共有や一貫性のある指導・支援はもちろんのこと、特にこれまで取り組んできた、環境の調整や段階を踏んでの課題設定を通して、算数の時間では A の変化や成長を感じられることが増えたと思う。変化や成長が感じられる理由として、毎回活動内容が大きく変わらず、見通しがもちやすい国語や算数、自立活動の個別学習の時間が好きということは大きな要因の一つ

であるが、それがＡの得意なこと、伸ばせる部分でもあると思う。Ａは来年中学部に入学する。学校生活において好きなことばかりではなく、苦手なことにも挑戦していかなければならないことも増えてくると思うが、就労までにＡの得意なことはできるだけ伸ばし、苦手なことにも挑戦しながら、Ａの自信を育んでいきたいと思う。

小学部で過ごす時間も残り数ヶ月で、一緒に学習出来る時間も残り少ない。短い時間ではあるが、Ａが集中できる環境や効果的な支援について考えたり、他傷や問題行動をできるだけ出現させないために、今後もやりとりを通して気持ちに折り合いを付ける練習を今後も積み重ねたりしていきたいと思う。